

めくらぶどうと虹 《にし》

宮沢賢治

青空文庫

城しろあとのおおばこの実みは結むすび、赤つめ草の花は枯かれて焦茶色こげちやいろになり、畑はたけの粟あわは刈かられました。

「刈かられたぞ」と言いいながら一ぺんちよつと顔かおを出だした野鼠のねずみがまた急いそいで穴あなへひっこみましました。

崖がけやほりには、まばゆい銀ぎんのすすきの穂ほが、いちめん風かぜに波立なみだつています。

その城しろあとのまん中に、小さな四しつ角かく山やまがあつて、上のやぶには、めくらぶどうの実みが虹にじのように熟うれていました。

さて、かすかなかすかな日照ひでり雨ふが降ふりましたので、草はきらきら光り、向むこうの山は暗くらくなりました。

そのかすかなかすかな日照り雨が霽れましたので、草はきらきら光り、向こうの山は明るくなって、たいへんまぶしそうに笑っています。

そっちの方から、もずが、まるで音譜をばらばらにしてふりまいたように飛んで来て、みんな一度に、銀のすすきの穂にとまりました。

めくらぶどうは感激して、すきとおった深い息をつき、葉から雫をぽたぽたこぼしました。

東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふつと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれました。

そこでめくらぶどうの青じろい樹液は、はげしくはげしく波

うちました。

そうです。今日きょうこそただの一言ひとことでも、虹にじとことばをかわした
い、丘おかの上の小さなめぐらぶどうの木が、よるのそらに燃もえる青
いほのおよりも、もつと強い、もつとかなしいおもいを、はるか
うつく
の美しい虹にじにささげると、ただこれだけを伝つたえたい、ああ、それ
からならば、それからならば、実みや葉はが風かぜにちぎられて、あの明
るいつめたいまっ白しろの冬ふゆの眠ねむりにはいつても、あるいはそのまま
枯かれてしまってもいいのでした。

「虹にじさん。どうか、ちよつとこつちを見てください」めぐらぶ
どうは、ふだんの透すきとおる声こゑもどこかへ行いって、しわがれた声
を風かぜに半はん分ぶんとられながら叫さけびました。

やさしい虹は、うっとり西の碧いそらをながめていた大きな碧い瞳を、めくらぶどうに向けました。

「何かご用でいらっしやいますか。あなたはめくらぶどうさんでしょう」

めくらぶどうは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて輝いて、いきがせわしくて思うように物が言えませんでした。

「どうか私のうやまいを受けとってください」

虹は大きくといきをつきましたので、黄や堇は一つずつ声をあげるように輝きました。そして言いました。

「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか」

「私はもう死んでもいいのです」

「どうしてそんなことを、おっしゃるのです。あなたはまだお若いではありませんか。それに雪が降るまでには、まだ二か月あるではありませんか」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないんです。あなたが、もし、もつと立派りっぱにおなりになるためなら、私なんか、百ペンでも死しにます」

「あら、あなたこそそんなにお立派りっぱではありませんか。あなたは、たとえば、消えることのない虹にじです。変わらない私です。私などはそれはまことにたよりのないのです。ほんの十分か十五分のいのちです。ただ三秒びょうのときさえあります。ところがあなたにか

がやく七色はいつまでも変わりません」

「いいえ、変わります。変わります。私の実の光なんか、もうすぐ風を持つて行かれます。雪にうずまって白くなってしまいます。枯れ草の中で腐ってしまいます」

虹は思わず微笑いました。

「ええ、そうです。本とうはどんなものでも変わらないものはないのです。ごらんなさい。向こうのそらはまっさおでしよう。

まるでいい孔雀石のようです。けれどもまもなくお日さまがあすこをお通りになつて、山へおはいりになりますと、あすこは月

きみそう

見草の花びらのようになります。それもまもなくしぼんで、や

がてたそがれ前の銀色と、それから星をちりばめた夜とが来ま

す。

そのころ、私は、どこへ行き、どこに生まれているでしょう。また、この眼めの前の、美うつくしい丘おかや野原のほらも、みな一秒びようずつけずられたりくずれたりしています。けれども、もしも、まことのちからが、これらの中にあられるときは、すべてのおとろえるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。わたくしでさえ、ただ三秒びようひらめくときも、半はん時とき空にかかるときもいつもおんなじよろこびです」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌います」

「それはあなたと同じです。すべて私に来て、私をかがやかす

ものは、あなたをもきらめかします。私に与えられたすべてのほめことばは、そのままあなたに贈おくられます。ごらんなさい。まことの瞳ひとみでもものを見る人は、人の王のさかえの極きわみをも、野の百合ゆりの一つにくらべようとはしませんでした。それは、人のさかえをば、人のたくらむように、しばらくまことのちから、かぎりないのちからはなしてみたのです。もしそのひかりの中でならば、人のおごりからあやしい雲と湧わきのぼる、塵ちりの中のただ一いち抹まつも、神かみの子のほめたもうた、聖せいなる百ひゃく合ごうに劣おとるものではありません」

「私を教えてください。私を連れて行ってください。私はどんなことでもいたします」

「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考

えています。すべてまことのひかりのなかに、いつしよにすむ人は、いつでもいつしよに行くのです。いつまでもほろびるということはありません。けれども、あなたは、もう私を見ないでしょう。お日様ひさまがあまり遠くなりました。もずが飛とび立ちます。私はあなたにお別わかれしなければなりません」

停車場ていしやじょうの方で、鋭すい笛とふえがピーと鳴りました。

もずはみな、一ぺんに飛とび立って、氣違きちがいになったばらばらの楽譜がくふのように、やかましく鳴きながら、東の方へ飛とんで行きました。

めくらぶどうは高く叫さけびました。

「虹にじさん。私をつれて行ってください。どこへも行かないでく

ださい」

虹にじはかすかにわらったようでしたが、もうよほどうすくなつて、はつきりわかりませんでした。

そして、今はもう、すっかり消きえました。

空は銀ぎんいろ色の光を増まし、あまり、もずがやかましいので、ひばりもしかたなく、その空へのぼつて、少しばかり調ちようし子はずれの歌をうたいました。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

めくらぶどうと虹 《にじ》

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>